

泥んこの金メダル

那岐エコウ

半年くらい前から右足の調子が悪くなり、整体に行ったり、腰の麻酔に行ったが回復せず、玉葱の苗を出荷する頃から右足を引きずりながら歩くようになって、日々の生活に支障をきたすほどになり、病院に行くと「腰部脊柱管狭窄症」で手術が必要とのこと。

二ヵ月後に手術だった。医学の進歩と医師の技術の高さで、内視鏡を使つての手術は二時間もかからず終了。麻酔が醒めてからはあの辛い痛みはなく、スーツと気持ちが良かった。点滴を二本、尿取を着けたまま六人部屋に入った。「大変なことになった」と思った。二日目の朝、牛乳と簡単な食事が終わった頃に、私の所へ、カーテンを開けて一人の知らない女学生が訪ねて見えた。看護学校へ通う生徒で、「今日から数日間は那岐さんの担当になりましたのでよろしく願います。二年の川上といます」とのこと。

びっくりしたが、話によると、学校で学びながら交代で病院に来て、患者に接する実習をする、とのこと。

「わたしには何も勉強の役に立つような話はないよ」と伝えたが、「何でもいいのです。お仕事のこと、趣味のことなど……」

ということ、一日目は体を横にしたままで、自分の仕事のことや家族のことを話した。この日は三十分程で彼女は引き上げた。手術後のことなので遠慮したのだろう。

翌朝、九時を過ぎた頃、彼女が見えた。

「おはようございます！ ご気分はどうですか？」

「ありがとうございます。お蔭で大分いいです。今日は点滴が一カ所だけになって、痛みも無く、トイレにも行けられました」と、回復していることを伝え、私の趣味の話になり、魚釣りが好きで、川や池、海へ行ったことを話す。

「川ではフナ、ウナギやナマズ、池ではコイやフナが釣れますよ。鳥取の海へは車で一時間半かけて行って、豆アジ、カレイ、キスやセイゴなどが釣れるんだけど、いつも釣れる訳じゃない、相手（魚）にも都合があることで……。釣れても釣れなくても、釣竿を持つて海を見に行くんですよ」

「へー、面白いですねー」

相槌を打ちながら聞いてくれる。

だから話は止まらなくなる。

「今はもう出来ないけど、若い時は登山が好きで、友達と富士山、立山、大山などに、地

図とにらめっこして、電車の時刻表を片手に、何処の駅に何時に着いて、それからバスで何分で、そこからいよいよ登山道に入って、と日程を立てる時は胸が弾みましたよ」

「大変だけど面白い旅ですね！」

三十分余りの会話は私の一人語りで、気分良く過ごさせて頂いた。

その翌日も、九時過ぎに川上さんの姿が見えた。

「おはようございます！ 今日の具合はどうですか？」

「はい、ありがとうございます。日に日に良くなっているように思います」

「今日は点滴も取れて、体に何もついていないのでリハビリが始まります。午後には風呂にも入れますよ。良かったですね！」と、共に喜んでくれる。

「今日は血圧を測らせてください」と言って血圧計を持ってきた。彼女の後ろには正看護師の方がついておられた。

慣れない手つきで丁寧に腕に巻き付け、プシュッと空気を入れたが、一回目は失敗。二回目は少し巻き直してから測って、

「上が120、下が70です」

指導する看護師の目が、計測作業を見つめている。

緊張の時間だった。私も少し緊張した。

「ハイ、いいですよ」

看護師のかたの合格の言葉。

「ありがとうございます」

丁寧に礼を言っ、二人は引き上げて行った。と、思ったら、すぐに彼女がやって来て、

「那岐さん、ありがとうございました」

「計器を借りて来ました。もう一度測らせてください」と言う。

「いいですよ。何回でも」と言い、袖をまくって腕を出すと、巻き付けの練習を何回かして計測にかかる。

「上が110、下が70です」

今度は怖じ気ないで、少し慣れた手つきになっていた。体で覚えようと一所懸命な態度に感心した。

暫くすると「計器を返してきました」と言ってやって来た。

「勉強が大変ですね」と言うと、

「夜もテレビを見る時間がないんです。予習復習をして次の日の授業に間に合わせなくて

はいけないんです」

「買い物は？」と聞くと、

「友達と行きます。でも、あまり外に出ることはありません」

なかなか自由な時間が取れない様子。

あまり聞くのも悪いので、また、自分の日常の生活の話をして終わったが、特に彼女の役に立つような内容ではなかった。

数日過ぎて、病院での生活にも少し慣れ、リハビリも毎日繰り返し、歩行器から「次は杖で歩いてみましょう」と言われた頃のことだった。

同室の入院患者の山田さんが、腹帯のことで看護師の方に相談していた。内容はよく分からないが、女性の看護師の方が「先生に相談して来ます」と言って、引き上げて行った。その日は、新しく入院した患者さんの相談が多数あった模様で、担当の看護師の方も、他の方も夕方六時の食事時と重なって、配膳などでバタバタと駆け回って、パニック状態だった。患者の山田さんへの答えは返って来ない。

そして、先生も看護師の方も勤務を終えられ、それぞれ夜勤の方と交代して夜を迎えた。その後、夜勤の看護師さんが夜中に、みんなを起こさないように忍び足で、三回は山田さんを見に来られたのを覚えている。

翌朝、まだ暗いうちから、看護師の方々が動いていた。

朝六時、男性看護師の鈴木さんが自己紹介をして、山田さんにお伺いを立てる。

「おはようございます。山田さん、具合はどうですか？」

「『どうですか』もあるか！」

いきなり大声で怒鳴り出す。叩きつけんばかりの音が部屋中に響いた。

「きのう、痛いところがあるので見てくれ、と頼んどったのに返事も無いし、手当てもしてくれりゃあせんがな！」

これには鈴木さんビックリして、声も小さくなってしまった。完全に負けてしまった。最初の一喝が効いてしまった。

「私は何も聞いてないんですが」

山田さんの勝ちのペース。

部屋に響く大声が続く。

「女の看護師の人に言うたら『先生に言ってくる』言うたけど、言わなんだじゃろうがな！」
そして続く、

「放つとるんなら、わしゃあ今日帰るけん、先生を呼べ！ 支度をして息子に来てもらう」

私は聞いていて（困るのは山田さんの方だし、家族の方だって大変だ。転院だって先生の紹介がないとなかなか入れないし……）と思うが、くちを挟む訳にもいかない。

「体温と血圧だけ測らせてください」

鈴木さんは平身低頭で頼み込んで、すみません、すみません、で何とか自分の役目だけ果たして引き上げざるを得なかった。

しばらくして鈴木さんが食事を運んで見える。

「食事はいらん！ 食わん！」山田さんがムツとした口調で言う。

（そのつもりだろうが、腹がへるのになあ……）と思う。

鈴木さんは何も悪くないのに、困ってしまったている。

暫くして、今度は、女性看護師の井上さんが病室に入って来た。

「山田さん、食事取らんといけんよ」

諭すように言う。

「今日は考えるけん。先生を呼んでくれ」

井上さんにも手におえない。誰の言葉も受け付けけない。

「先生は、今日は他の所の応援に行かれました」

担当の先生は評判が良く、引っ張りだこの様子。

また二時間ほどして、井上さんが来た。

「今日は針を抜くからね。そしたら車椅子に乗ってみようね」

とにかく優しく、優しく労わる。

女の人には山田さんも弱い。段々声が小さくなり、頷いている様子。

「ちょっと横向いてもらっていい、山田さん？」

（そうだよ、針や管があるままでは帰れんじやろ。全く……。）

少しずつ井上さんのペースになる。

「山田さん、テープを剥がしますよ。ちょっと痛いかも知れませんが、頑張っってね！」

女性の優しい声が、大の男を従わせる。任務とはいえ大変だと思う。

「少しだけね」

「痛い！ いたい！」

「痛いね！ 痛いね！ ごめんなさい、ごめんなさい」

山田さん「痛い！」の後、声が出なくなった。

井上さん、構わずにビリビリッと引っ張る。

「アイタッ、アイタッ、タッ タッ タッ タッ もう少し！」と、井上さん。

山田さん、声を出さず、口を歪め、目を瞑ってガマンしている様子が伺える。

「ごめんなさいね。ありがとうございます」と、井上さん。

終わったと思っただら、

「もうひとつよ。頑張っつて！ ごめんね。イタツ イタツ タツ タツ。はい、取れました。終わり！」

ハキハキした声が、部屋に響き渡る。

全く井上さんのペース。大きな明るい声で、不機嫌な山田さんをもとせず任務を果たされた。

「ありがとうございました！」

井上さん、山田さんに丁寧にお礼を言って手当を済ませ、無事朝の行事が終わった。劇場のシーンなら万雷の拍手が起きる場面でした。

この病院は先生の技術も一級なら、看護師の方がみんな丁寧で、優しいことも一級だと感じた。

私も（よかった！ 冬の天気も晴れ、心も晴れて……。皆さんご苦労様でした！）

その後も、昼食時はまだ山田さんのへそ曲がり少し残っていた。

「食事は取らんといけませんよ」

井上さんのハキハキした声に、みんなが元気をもらった。

「考えとく……」

「何を考えるの？」

今度は山田さんをからかっている。

午後になって、井上さんの手によって山田さんは車椅子に乗せてもらい、機嫌よく、笑い声も少し聞こえだした。

病院においては日常茶飯事の出来事だと思いが、馴れた言葉使いと手際に、私の目には母親と子供の姿に映った。大変な仕事だと思う。薬だけでは治せない、蔭の大きな力があるんだとつくづく思った。

優しい心遣いで今日の難関を乗り切った井上さんは、立派でした。私から心の金メダルをあげよう。おめでとう！

午後四時、山田さんは安らかな寝息を立てている。

七転び八起き。大きな夢に向かって前進あるのみ。研修も看護も、苦しいことの連続かも知れない。それが成長につながって、辛さに泥んこになり、泣きながら耐えた成果が金

泥んこの金メダル

メダルへの道なのかな。

その週末、私のリハビリも進んで「もう数日で退院ですよ」と、先生から言われた。生き返ったような、爽快な気分になった。